

変わらぬもの、変わるもの

阿部 雅彦

私が社会人として初めて赴任した日、それは四月も終わりに近い春の日だった。東京駅を包んでいた暖かさとは打って変わって、盛岡駅のホームに降り立った瞬間に身が締まる寒さに背筋がピンと伸びた記憶がつい先頃のように思い出される。千葉に生まれ、千葉で育った私が、県外に住んだ初の地が岩手県は盛岡市であり、既に五年になろうとしている。

岩手県に住んで、様々なことを日々学んでいる。学んでいる、というよりも、吸収し尽くしている、と述べた方が的確だろうか。仕事に関してはもちろん吸収することは多いが、何より人生観や世界観が大きく好転した実感がある。私は盛岡への赴任を希望していたのだが、正直なところ、業務上の一定程度を学んだところで東京へ戻りたいと考えていた。しかし、岩手に赴任してしばらくして、「何故、私は東京で仕事がしたいと思っているのだろう」と疑問に思った。このことが、まさにこの文を通して、岩手県の理想の姿を思い描く最大の原点となった。

私が思い描く岩手県の十年後の理想の姿、それは「郷土を愛する精神を強く持ち、他者を大切にす気持ちは持ち続ける人々が生きる活力ある社会」である。岩手に住み、生きることが、人の温かさを感じさせてくれたことを深く感じる。何気ない挨拶や、他者をいたわる気持ち、これは決して社会に当たり前に存在しているものではない。少なくとも、千葉で生活していた頃と現在では全く人間観が異なると感じる。

社会人として五年近くを岩手で生活しているから、岩手に住む友人もたくさん出来たが、彼らから一様に感じるのは、地元への強烈な愛着心である。私自身は特に地元である千葉への愛着心が無かったため、当初は、何故彼らが愛着心を抱くのかを理解するのが困難であったが、今ではその理由を肌で感じている。何故なら、岩手が素晴らしい土地であり、素晴らしい人がたくさんおり、他者を思いやる気持ちや地元を愛することを大切な価値として、営々とその文化が生きているからだとは私は考えている。「他者を排除しない風土が岩手にはある」と述べることはあまりに抽象的過ぎるかも知れないが、私にはそれを強く感じると共に、これが岩手に根付く最大の文化だと断言して憚らない。

私が携わる業務は鉄道業であり、多くの方に触れ合うのだが、岩手を知れば知るほど、もっと多くの人に岩手の良さを知ってもらいたいと痛感する。それに資するものとして、は新たな観光資源を発掘することや、世界遺産としての登録を待つことも大切な柱になろう。しかし、私が岩手の活性化に更に役立つと思っていることは、「岩手を知るために、岩手で生きてもらう」という長期滞在型の観光客誘致である。私が社会人として大きく育ったこの岩手の地で、多くの人々に岩手を知ってもらうことが私の夢だ。岩手の素晴らしさは、この地に住んで初めて伝わるものである。永住という形でなくとも、何とかしてこの地の素晴らしさを伝道したいと思う。

地元への愛着を持った若者が多く育ち、他者を思いやる当たり前の気持ちを抱く文化を、これからも「変わらぬもの」として維持、発展させていけば、より魅力的な地として、岩手に他所から多くの人々が流入し、多様化しつつより活力ある社会へと岩手は変わっていくと考える。逆説的ではあるが、「変わらぬもの」を変わらぬままに大切に守り抜いていけば、岩手はより優れた形へと「変わりゆく」と思うのだ。

私は十年後の夢として、その「変わりゆく」過程を大きく刺激したい。それこそが私が愛する岩手県の人々に出来る最大の恩返しなのだ、と使命感を持ちながら、今日も岩手山を遠く眺めている。